

Title	株仲間の研究(宮本又次著, 日本経済史研究所, 研究叢書第九冊)
Sub Title	
Author	中井, 信彦(Nakai, Nobuhiko)
Publisher	三田史学会
Publication year	1938
Jtitle	史学 Vol.17, No.2 (1938. 11) ,p.187(333)- 188(334)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19381100-0188

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

をかけずには居られぬ。

此處に集められた諸論文は、何れもその發表當時批評や紹介を経てゐるから、最新の筆になる倭姫命考について一言するに止めたい。著者は日本武尊が固有名詞でなく歴史朝廷の勇者或は天皇を指稱する普通名詞であるより推して、倭姫命も、『ひとり垂仁天皇の皇女にして、景行天皇の御妹なりし一女性をのみさし奉つたものではなく、同じ範疇に入るべき多くのヤマトヒメがあらせられた筈である』と做し、『ヤマトヒメとよばれたものが、古代日本に於ていかにして成立したか、いかなる位置を占めるものであるか』を研究されたのである。その結果、ヤマトヒメなる觀念は大和朝廷の大八洲國統一を背景とし、天照大神の國家支配の成就を基礎として始めて成立すること、従つて崇神天皇から景行天皇の時代にかけてこの命が出現されてゐるには充分な理由があることを説かれ『ヤマトヒメの如きは更に大きな位置が古代史上に要求されてよいのではないかと結ばれてゐる。

誠に示唆に富める見解ではあるが、尙ほ若干異論を挟む餘地がないではない。崇神、垂仁期に於ける神寶の強徴、國家的祭祀の施行、神宮と皇居との分離、天照大神の巡行等は何れも大和朝廷の宗教的征服の事蹟を語るものではあるまいか。従つて倭姫なる名は、此の時期に活躍した女性の齋主に附與せられた名稱と解すべきではないであらうか。又著者は倭迹迹日百襲姫命を耶馬臺の卑彌呼に、倭姫命を宗女壹與に充てられてゐるが、史料の據るべきものがない此の種の比定に、どれ程の價値があるかを疑問に思ふ。尙ほこの研究に於て、倭姫命に關する最も詳しい文獻たる倭

姫命世記が、『この書の成立についてはなほ充分明かでないものが多い』との理由で、全く顧みられなかつたのは遺憾である。世記については夙に伴信友の詳細な註釋もある程であるから、文獻學的批判を経て充分活用して欲しかつた。以上は倭姫命考の讀後感の概要である。

ともかく本書は、我國神話研究史上の一記念塔として、斯學研究者は勿論古代文化に關心を有する人々には是非一讀をお薦めする。終りに著者の眞摯なる研究態度に敬意を表すると共に、今後の活躍を祈つて筆を擱く。(四五二頁・定價參圓五拾錢)(中井信彦)

株仲間の研究

宮本又次著
日本經濟史研究所
研究叢書第九冊

本書は、徳川時代の組合的結合たる株仲間に關する、綜合的研究である。

著者は先づ緒論において、先行形態としての座と、集權的封建社會への過渡の様相たる樂座を觀察した後、鎖國による商品貨幣經濟進展の頓挫と集權的封建社會の固定による商工の世界に於ける保守、傳統、特權、統制の尊重に、株仲間成立の根本的理由を認めて居られる。

次で第二章「株仲間の成立」に於いて、江戸・大坂その他各地の株仲間成立事情を通觀し、その綜合によつて十條の原因を擧げ要するにそれが公的權力側の必要に出たものであること、又それらの原因には時代的に變化のあることを指摘されてゐる。

進んで斯くの如くにして成立した株仲間の實體が問題になる。第三章「株仲間の組織」、第四章「株仲間の機能」が即ちそれである、その中、株仲間の機構に現れた精神を宗教的精神、保守的精神、連帶的精神の三つとなし、これら經濟外的な精神を有する株仲間は、單なる功利的團體ではなく、血縁團體、地域團體より脱し切らぬ活動團體であり、そこに株仲間の共同社會性が認められると説かれてゐるのや、その共同社會性の故に株仲間には絶大な信用があり、(株仲間の機能はこの信用を裏付けるものに外ならなかつた)それは遠隔地との取引等に特に大なる使命を果したと論ぜられてゐる等は重要な點である。

かくて著者は再び歴史的敘述にかへつて、第五章「株仲間の衰頹」を天保改革以前の狀態、天保改革に於ける停止の事情、嘉永四年の再興以後、安政以後の四段に分つて説明し、更に進んで明治維新に於ける株仲間解放の事情と、その轉身としての同業組合の發展に迄及んで居られる。(第六章「株仲間の解放」、第七章「同業組合の發展」)

第八章結論に於いて、著者は株仲間を座及び同業組合と比較することによつてその特性は近世社會の特質がそのまゝ反映されたものであると做し、その近世社會の變質、衰頹と商業資本の特性より生ずる内在的理由とに、株仲間衰頹の原因を求められてゐる。

本書は著者が過去數年來發表せられた多くの論文を骨子として、體系的に綜合されたものである。吾々は此の書によつて、我國のギルド的結合の組織と精神、又その歴史的變遷を興味深く理解することが出来る。もとより、箇條書の形式を多く採られた

め、敘述に圖式的な嫌ひがある點、又史料が地域的に制限されてゐる點等が指摘されないではないが、此の方面に於ける最初の綜合的研究として、特に後學者のための手掛りとして、裨益する所大なるものあるを信じる。

この有意義なる研究を成就された著者に敬意を表し、拙き紹介の筆を擱く。(有斐閣發行・定價四圓二十錢)(中井信彦)

幕末軍艦咸臨丸

(文倉平次郎編
巖松堂書店發行)

萬延元年幕府は海外への始めての使節を米國へ送つたが、その時同使節一行護衛のためとて他に別の一艦がまた派遣せられた。その任に選ばれたものが咸臨丸であることは茲に改めて云ふまでもない。同艦は之がために遙々鵬程萬里の波濤をついて我が國としては最初の太平洋横斷と云ふ壯舉をなしとげると至り、而もその結果として日米外交交通史上は勿論或は我が海軍創建史上にも、或は新しき時代の文化伸張のためにも、極めて甚大なる價値と影響とを示すこととさへなつたのである。しかし夫れは先づともかくとして斯うして咸臨丸が此の航海により新興日本の心意氣を遠く異國にまで輝かしたことは蓋し幕末史上の一異彩と云はれなければならぬであらう。

今回文倉平次郎氏の多年にわたる咸臨丸研究が遂に實を結んで茲に鴻著「幕末軍艦咸臨丸」の刊行を見るに及び、前述の米國行の事情はもとより、咸臨丸に關する限り凡そ一切の事蹟が極めてつづさに傳へられるに至つたことは、以上の意味からして誠に悦